

# シンポジウム 「文学と権力」を傍聴して

中村唯史

## I

オデッサはハイパボリックな町で、バーベリが「オデッサ物語」他に書き表した、どぎついまでの華美さ、独得の言い回し、「オデシスト」であることへの独断的な誇りが市民の間にはまだ根強く残存している。けばけばしく化粧して恐ろしいほど短い真紅のスカートをはいた女性が乳母車をおして石畳の上を歩いている光景をみて僕が「いや、これは…」と口籠ると、一緒に歩いていたオデッサに生まれ育った知人は「これがオデッサだぜ」と、とてもうれしそうに叫んだ。

1991年11月12日から14日にかけて、このオデッサ市において、「文学と権力」と題するシンポジウムが開催された。同市の Дом ученыхの主催による。筆者は個人的な伝により頼み込んで、シンポジウムを傍聴させてもらうことにした。

当初、参加者は100余名、ソ連国内のみならず、アメリカ合衆国、ドイツ、ユーゴスラヴィア等国外からの参加者も予定されていたが、開催までに予定者の多くが参加を取りやめた。主な理由は、国内外の政治的な混乱である。チチェン・イングシェナ自治共和国の代表者は、当然姿をみせなかったし、ユーゴスラヴィアの研究者も同様であった。ソ連・東欧における権力機構・社会システムの崩壊が作家・詩人・芸術家・文学研究者たちに、当人の好むと好まざるにかかわらず、現在大きな影響を与えていることは言うまでもない。規制の権威や価値観が崩れてゆく中で、文学者がいかに生きて行くべくか、文学がどのようにしてその自律性を保ち、権力と関係を持つべきか、これはソ連・東欧の文学知識人にとって、極めて切実な問題である。

いかなる事情で、このシンポジウムがモスクワやサ

ンクト・ペテルブルグでなく、オデッサで開かれることになったのか、筆者は詳びらかにしない。だが、バグリツキー、パウフトフスキー、イリフ・ベトロフ、カタージェフ、オレーシャ、バーベリ等、1920年代のソ連文学を代表する作家・詩人が、この南欧風の瀟灑な港町から輩出し、かれらが、作家として市民として否応なく権力の壁にぶちあたり、それぞれの運命を辿っていったことを思い起こせば、この町で、ソ連の知識人が「文学と権力」を論じあうことは大層似つかわしいことと筆者には感じられた。

だが、これは筆者のいい気な文学的な感傷に過ぎなかったのだ。事実、ソ連の知識人たちにとって、ソ連の作家たちの辿った運命や創作姿勢は、客観的な研究対象ではなく、むしろ、極めて今日的な焦眉の問題、「自分自身」の問題なのである。報告の多くが主観的な独断に満ち、詳細な資料調査や論証を欠いて、飛躍的に結論を急ぐ傾きにあったのは、このためであろう。シンポジウムは、学術的に実りあるものと言うよりも、アメリカからの参加者K氏の言葉を借りれば、「現代ソ連知識人に支配的な気分、雰囲気、発想法を知るのに格好の機会」であった。

## II

文学史に不可触の部分が存在しなくなった今、ソ連文学者たちの研究対象は、以前に比べ明らかに多様化し、その領域を広げつつある。今回のシンポジウムでも、モスクワ・レニングラード等中央文壇のみならず、地方・辺境における'20-'30年代の文学状況に関する報告（シベリア・ボルガ中流域・サラトフ・カザフ共和国等）が少なからずあったし、また、忘れ去られた作家達（マルトィノフ、ニカンドロフ、ゾーズリ、シクルピー等）の発掘も盛んであった。もちろん、従来から著名であった作家達（ショーロホフ、ファデーエフ）についても若干の報告があったが、かれらは「全体主義文化」（かつての「社会主義リアリズム」現在ソ連ではこの名称で呼ばれている）の担い手として厳しく断罪さ

れていた。

だが、大部分の報告が対象としたのは、ブルガーコフ、ザミヤチン、プラトノフ、パステルナーク、マンデリシュタム等、1985年以後に主要作品が解禁となった作家・詩人達である。豊かで創造力に溢れる作品群が新たに研究者達の前に広がったのであるから、多くの研究者の関心がこれらの作家・詩人達に集中しているのは理解できる現象である。研究者の情熱を反映して、結論はともかく、実証的な意味において、筆者にも多く得るところがあった。

もう一つ今回のシンポジウムで注目されたのは、個々の作家や文学団体を対象とするのではなく、所謂「全体主義文化」、社会主義リアリズムを一つの社会的ないし精神的現象として捕え、これを文学史ないし思想史のうえに定義づけようとする試みが少なからずあったことである。この試みは遅かれ早かれ当然現われてこなければならぬものであったろう。参加者・聴衆の関心もこの手の報告に集まり、質疑応答も盛んであったので、今回のシンポジウムの核であったと、一応言うことができると思う。

対象の多様性、ある程度活発だった議論、だが、にもかかわらず、筆者が三日間のシンポジウムから受けた印象は、何か極めて単調なものだった。

### III

単調な印象を受けた主な理由は、恐らく、報告者達の問題設定、論理展開の仕方が互いに酷似していたことにある。一言で言うのなら、政治的な視点や枠組みが、個々の作品、作家、文学流儀を評価する際に、そのまま用いられているのである。革命後70余年に及ぶソビエト文学を一つの社会現象として総括しようとする報告において、この傾向が一層強まることは言うまでもない。

筆者が違和を感じた第一歩は、報告者が作家や作品を正しいか正しくないか、二項対立的に「判断」することで

ある。そして、その判断は、テキストや作家の言動を具体的に検討することによって得られるのではなく、対象が社会主義リアリズムに添ったものか否か、時の権力に合致していたか反していたか、によってあらかじめ定まっている。作家に関しても言え、ショーロホフやファデーエフは正しくないのであり、マンデーリシュタームやブルガーコフは正しい。結論を最初に提示した後、さて、報告者は徐に結論に見合う事実やテキストを拾い上げ、これを論証していく。

シンポジウムの間、筆者は留学一年目、モスクワ大学のゼミナール「文学におけるリリズムの研究」を聴講したときのことを思い出した。D教授が「ショーロホフにおけるリリズムの特徴は…」と言いかけた際、ひとりの学生が立ち上がって、「ショーロホフにリリズムなんかあるわけがないじゃないですか」と遮ったのである。その後、二人の間でかなり感情的な議論が続いたのだが、筆者は教授の側に共感を覚えた。「たとえ書く動機がいかなるものであれ、創造の喜びなしで書く、作家や詩人というものはいない。作家や詩人は各々の世界観に基づいて現実と葛藤したり断絶したりする。この葛藤や断絶の結果として各々に独得の叙情は自ら生まれてくるものであって、それは作家や詩人の世界観とは無関係とは言われないが、これから独立したものである。」

残念ながら、D教授は日和見であるという批判を筆者は一度ならず聞いてきた。テキストを先入観なしに細かく読んでいこうとする研究者は少なくないはずだが、かれらの声はほとんど聞こえてこない。今回のシンポジウムにはモスクワ大学の先生方は参加していたのだが、D教授の姿はなかった。そして、ゼミナールにおける学生の立場がシンポジウムを席卷していたという印象である。例えば、クラスノヤルスクからの参加者の報告は、今回のシンポジウムには珍しく実証的に、フトゥリストたちの多くがポリシェヴィキを支持するに至る過程を丹念に辿ったものであったが、結論としてかれらがポリシェヴィキを支持したというだけの理由から文学運動としてのフトゥリズムをほぼ全面的に否定するに及んだ。この報告の際、司会を担当していたアメリカ合衆国のトマス・ハンゼン氏は、たまりかねて「なぜ正誤を決めなくて

はならないのですか。あなた方は敵を、責任者を探すのが研究者の仕事だと考えていらっしゃるのですか。」と報告者に反問していたが、筆者はハンゼン氏に同感である。

ソ連の文学研究者は、概して、現実と文学作品との関係、作家・詩人自身とかれらの用いる言葉との関係を極めて単純なものに理解していると筆者は思う。例えば、オデッサ大学の研究者D氏は“全体主義文化”が19世紀以来の左翼的な文学・文化の必然的な帰結であると結論し、その証拠として両者の間の術語の統一性を挙げる。また、オデッサのS氏は、「全体主義文化の言語に対する観察から」と題して、'20年代の多様な文学的な実験が'30年代に掛けて、次第に、「社会主義リアリズム」の名のもとに、一つの方向に収斂していく過程を、当時の文学作品や文学批評の変遷を通じて辿ろうと試みたが、「'20年代文学から全体主義文学に移行する際、変化は言語のどのレベルに最も顕著に現われているか」との質問に対し、「語彙」と答えたのである。例えばチェコのパーツラフ・ハベルが「言葉についての言葉」の中で述べているような、ある一つの術語が、時代によって、人々に対する意味や印象を違えていく現象には、かれらは思い至っていない。

今回のシンポジウムの核となったのが、社会主義リアリズムを総体的に理解・定義しようとする試みであると先に書いたが、個々の作品分析や詩人・作家の事跡の発掘が既に政治的な枠組みの中にみられている以上、実証的な手続きを経ないこの種の報告がより一層政治的なニュアンスを帯びたのは自然と言えれば自然なことである。これら総括的な報告の一般的な傾向をまとめると次のようになるだろう。

「社会主義リアリズム」はスターリン期の“全体主義文化”体制の中で、政府が民衆の意識を統御・支配するための重要な装置であった。そこでは創作者のオリジナリティなど全く必要ない。作品の中に現われるべきイデー、人物の性格・境遇、筋、術語の一部まで権力によって用意されているからである。創作者の仕事は、与えられた仕事を適当に組み合わせ、互いに類似した無数のヴァリエーションを作ることであった。社会主義リアリズムの作品は、地名、時代に当

時の読者にとって現在と現実のものを用いながらも、それらの要素を予め定まったイデーに基づいて再構成するがため、その時空間は一種抽象的な「いつでも、どこでもないもの」となる。社会主義リアリズムとは作品にも基づいて定義するならば「神話の現実化」である。

定義として論理として、上のような議論が間違っているとは筆者は考えない。が、無数に類似の報告を聞きながら、ある違和感を覚えたことも事実である。と言うのは、報告のほぼすべてが、上の論理の帰結として「したがって社会主義リアリズムは文学ではない。正しくない。」と結論づけていたからだ。「したがって」というその根拠は、つまり創作者の主体性が「社会主義リアリズム」においては極度に制限されていたことであり、「文学」が支配体制の一機構と化していたことであろう。だが、創作者の主体性といふ文学の自律性といっても、それらはロマン主義以降の西欧文学に初めて現われてきたものに過ぎない。言い換えれば、19世紀以降の西欧の作家達にしたところで、当人たちが意識していたいなかたにかかわらず、かれらが当時の体制における一つの構成要素であったことは否定できまい。まして、19世紀ロシアの大文学作家にとって、少なくとも文学の自律性などというものは問題にもならなかったろう。

ロシア（ソ連）の研究者達は、作家の内面性の自由、文学の権力や体制からの独立といった、西欧においてさえ今、修正を余儀なくされつつある考え方を極めて古典的な形で受け入れ、それを用いて「社会主義リアリズム」を大急ぎ裁断してしまおうとしているように見える。それがロシア文学の「ヨーロッパへの復帰」なのであるだろうか。モスクワのある若手研究者の報告は、現代ロシアのインテリゲンチアのこのような志向を鮮明に代表していた。手順を踏んだ論理はなく、主張だけが溢れていたその報告において、「文明とはキリスト教のことである。すべての文化はキリスト教に根ざしている。我等の文学はヨーロッパに帰ろう。」と繰り返し呼びかけたのである。これはカザフ人研究者の猛烈な反発を当然ながら呼び、会場の聴衆もさすがに困惑気味であったが、この研究者はあからさまに言っただけなのであって、潜在的に今

回のシンポジウムの参加者の多くはヨーロッパ至上主義だと筆者には感じられた。

オデッサ大学のD氏の報告は、バルトやフロムの概念を駆使して、「社会主義リアリズム」を“権力-文学”の二項対立ではなく、“権力-文学（知識人）-読者（民衆）”の三つの軸から見ようというものであり、当時の読者が社会主義リアリズムを好んで読み、事実感動していたことを指摘した点、社会主義リアリズムを全体主義文化である以前に大衆文化として捕えようとした点に、ほかの報告に比べ新鮮さがあるのだが、彼にしても社会主義リアリズムをアンチ・テーゼとして、あるべき文学の姿を思い描いている。彼の報告や論文から感じさせられるのは、「作家の内面の自由」「文学の自律性」といった19～20世紀前半までの西欧の価値観への郷愁であり、この郷愁が他ならぬバルトやフロム等、西欧の価値観に修正を施した人々の発想によって論理づけられていることは、なかなか興味深い現象である。

シンポジウムの参加者の宿舎は市郊外のホテル「ユーノスチ」で、黒海沿岸まで歩いて10分、静かで環境はよいのだが、フロントの受付嬢がヒステリックで、シャワーからお湯がでなかった。僕と相部屋になったアメリカの研究者のF氏はお酒好きの人で、毎日二人でビールを飲んで（F氏は青年時代にウオッカをイッキ飲みして意識不明になった後遺症で未だにウオッカが飲めない）、シンポジウムの感想を話し合ったのだが、氏は「このシンポジウム自体が何か全体主義的なのだ。非常に危険だ。」と興奮して繰り返して言っていた。筆者は、F氏の言葉に同感である。予め政治的視点により設定された公理から文学作品にアプローチする方法、現実と文学、あるいは、書き手と言葉の関係についての直線的理解（文学は現実を反映するか現実に反発し、言葉は書き手の意図に必ず対応する）-「社会主義」から「民主主義」等々意匠を変えて、もう一度同じことが繰り返されているという印象である。

そういうわけで、シンポジウムの報告を次々と聞くうちに、筆者は段々滅入っていった。三日間の会期が終わった時にはかなりげっそりしていたのである。ただ個人的に僥倖であったのは、筆者が専門にしたいと思っているバーベリの実証的な研究では第一人者であるH.A.スミールン氏と知り合えたことであつた。ウッディ・アレンを気難しくしたような顔のスミールン氏は、しかし、親しみやすい人柄で、「極東の島国でさえバーベリが翻訳されている」ことに感動して、シンポジウムの終わった日の午後、オデッサの町を細かく案内してくださつた。バーベリの作品は一言一句暗唱している様子である。思い切って、上に書いたようなシンポジウムについての感想を述べてみたのだが、氏の答えは、三日間同じことを聞いてきた自分にとっては新鮮であつた。「そうですね、スターリンが死んだ時には（私も含めて）やっぱり多くの方が悲しんだのです。でもまあ、これからは多分イデオロギーなしでもうまくやっていけるでしょう。それで良いのだと思います。…あ、ここがバーベリも働いていた『モリャーク』の編集部のある建物です。」実に淡々とした答え方、それよりはバーベリについてももっともっと語りたいふうで、筆者は幸福な気がした。そして、これは感傷だが、氏の中に古き良きソヴェト・インテリゲンチアを見たいと思つたのである。氏は自分の研究を愛している。それだけでは足りないのかもしれないが、それなしには文学研究は始まらないだろう。そして、対象に対する素直な好意を伴つた報告はシンポジウムに稀であつた。

だが本当はそうではないのかもしれない。「文学と権力」というテーマに縛られて、報告者の多くがよそゆきの顔を見せたこともあり得るだろう。後日、シンポジウムの参加者のひとりのお宅に個人的に伺つたとき、彼は好きな作家の作品について話し続けて、とても楽しそうであつた。こちらからも楽しく相槌を打ちながら、筆者は不思議だつた。なぜこの人はシンポジウムで、口調も自虐的に、40年代文学の



欠点をあげつらってばかりいたのだろう。シンポジウムでのニヒリスティックな側面と今楽しそうに文学談をやっている側面と、二つの側面はこの人の中でどんなふうに結びついているのだろう。当人に尋ねてみたい気もしていたがやめにした。議論の末に必ずロシア人が口にする決まり文句「結局外国人にはロシア人が理解できないのさ」をまた聞く破目になりそうな気がしたからである。